

## Topic

## 環境教育と山村振興の夢物語

市原 あかね

長い休暇をとることができるなら、いろいろな種類の年取った樹木が生えている森へ行って、気に入った木の側でボーとしたりスケッチしたりしてすごしたい。山の楽しみ方はいろいろあるが、最近森の美しさに浸ることが一番の魅力だ。本当なら一週間とか一月とか山にこもってすごせばいいのだが、そんな休暇は取れなかった（日本の余暇行動の特徴の一つ）。だから日程をこなす登山になってしまったが、選ぶ山は気軽に行けて森にあふれている（ハズの）中低山で、私にとってのリゾート（しばしば訪れる場所）はここ数年丹沢と奥多摩だった。

丹沢は山や森の楽しみ方を教わった場所だ。札掛の丹沢ホームを中心とする一帯は、両親につれられてしばしば来た場所だった。丹沢ホームの故中村芳男氏を中心とする自然保護団体が主催する「森の学校」（小中学生向けの環境教育）に参加したのも丹沢だった。今思い返すと、この「森の学校」の教育内容はよく練られてたいへん高度なものだと言える。森林や動物や地質や星に関する科学的な知識とともに、精神的な経験（C. W. ニコル氏の樹木や森林に支えられ育てられたという情緒的经验に代表されるような）も得られるよう計画されていた。そのうち特に印象に残っているのは、暗やみ教室と友達の木を一本選んだことだ。

暗やみ教室では、子供達は夜の森でしばらくの間一人ぼっちで静けさに耳を澄ますことを要求される。すぐそばを小動物が走り抜けた音を聞いたと報告する子もいれば、怖くてずっと目も耳も塞いでたという子もいた。どの子にとっても新しい森とのつきあいだったことは確かだ。友達の木を選んだのも重要な内容の一つだったと思う。何百年も生きてきた

たくさんのモミの木の中から友達になってほしい木を一本選び、その木と話をしきよならの挨拶をして森の学校をおえる。子供達の中には、次の年にきたときも友達の木を覚えていて着いたらすぐにその木のところに飛んでいく子もいた。

リゾート開発といえば金太郎飴のようにゴルフ場とスキー場とテニスコートが出されるが、これを消費者側の問題としてみれば余暇行動の画一化ととらえることができる。スキーにはスキーなりの楽しみがあるし、農業にガードされたゴルフ場で「自然を満喫する」のも、自然との付き合い方をそれしか知らない人にとっては大切なことだろう。しかし、自然保護団体が実践してきた環境教育の成果がさまざまに生かされ多様な森の楽しみ方を多くの人を経験すれば、余暇のすごし方も変化するだろうし美しい森の開発と維持に対する要求も高まるだろう。樹種による木肌の違いを知り木製品の良さを知れば、混成林の経済的価値は高まるし、森林管理・育成の費用負担の合意も得ることができるだろう。

山村を抱える自治体が地域振興を考える場合、自然保護団体と連携して環境教育に力を注ぐことは一つの道だと思う。スギやカラマツに単一化した山をすこしづつ美しい混成林に変え環境教育を進めていくためには、教育の専門家や森林育成・管理の専門家が必要だ。家具製作の技術者もおおい必要となろう。こうした就職口は、地域住民が能力を高めて就くこともできるだろうし環境教育を受けた若い人々が山村で生活しにやってくる道にもなる。内発的発展の道を開くものとして環境教育と自然保護をとらえることができるのではないだろうか。

(金沢大学経済学部講師)